

とちぎの慣習・ことば集

～のこしていききたい つたえていききたい とちぎ^{じん}人の想い～



栃木県教育委員会

はじめに

栃木県には、相手を気遣う行動やことばかけ、地域の中で協力し合いながら行われてきた祭りなどが数多く根付いています。これらは、よりよい人間関係をつくり、相手を思いやる優しい社会を形成するために大きな役割を果たしてきたことから、私は、こうした慣習やことばを後世の人たちにも伝えていきたいと考えておりました。

県内各地の身近に伝わる慣習やことばを栃木県教育委員会が広く募集したところ、本県にゆかりのある県内外の方々から、多くの事例をお寄せいただきました。その中から、特に「よりよい人間関係づくりにつながる行いやマナー」、「感謝や願いを込めて地域で協力して行ってきた行事」、「県民が親しみを持って使ってきたことば」を選定し、とりまとめたものが本資料集「とちぎの慣習・ことば集～のこしていきたい つたえていきたい とちぎ人の想い～」です。

この資料集を、学校や地域、家庭などのさまざまな場面で活用していただき、先人の生活や文化に“想い”をはせ、ふるさと「とちぎ」のすばらしさを多くの方々が共有できることを願っています。

平成31(2019)年3月

栃木県知事 福田 富一

構成

- 本資料集は、よりよい人間関係づくりにつながる行いやマナー、感謝や願いを込めて地域で協力して行ってきた行事を「のこしていきたい つたえていきたい慣習」、県民が親しみを持って使ってきたことばを「のこしていきたい つたえていきたいことば」と表しています。
- 「のこしていきたい つたえていきたい慣習」では、各事例が関連するカテゴリーに分類しています。カテゴリーは、「マナー」、「衣食住」、「地域」、「季節」、「祭り」、「人生」の6つとしました。
- 本文には、事例にまつわる事柄 一意味、こと 伝わってきた経緯や場面、から 使い方などを掲載しています。また、「とちぎ人の想い」として、応募された方のなつかしい思い出なども紹介しています。
- スポーツイベントをはじめ様々な場面で親しまれている「県民の歌」を、とちぎへの想いを深めるものとして「特別編」に掲載しました。

【例】しもつかれ

～とちぎ人の想い～

- ・「しもつかれ」という言葉を聞くと、“ふるさととちぎ”を思い出します。
- ・初午はつまには、稲荷神社いなりに赤飯と「しもつかれ」をお供えていました。



目次



事例が関連するカテゴリー

- **マナー** れいぎ 礼儀、対人関係をよくすること、物を大切にすること しゅうかん 習慣等に関すること
- **衣食住** 衣・食・住に関すること
- **地域** ちいき 地域が協力した行事に関すること
- **季節** ふしめ 季節や節目の行事に関すること
- **祭り** 祭りに関すること
- **人生** ざいれい 一生の節目ごとの儀礼、せんぞ 先祖への供養 くよう に関すること

☆のこしていききたい つたえていききたい慣習

事例	(50音順)	マナー	衣食住	地域	季節	祭り	人生	ページ
1 安産を願う風習		○					○	1
2 あんばさま				○	○	○		2
3 えびす講 (こう)					○	○		3
4 釜の蓋 (かまのふた)			○		○		○	4
5 川俣の元服式 (かわまたのげんぶくしき)		○	○	○	○		○	5
6 きごころ寝 (ね) をしない		○	○					6
7 義理 (ぎり) に行く		○					○	7
8 くされ鮓 (ずし)			○		○	○		8
9 こじはん		○	○					9
10 事八日 (ことようか)		○			○			10
11 サガンボ、モロ			○					11
12 サナブリ		○	○	○	○			12
13 敷居 (しきい) をふまない		○	○					13
14 ジブ		○	○					14
15 しもつかれ		○	○		○	○		15
16 ジャンボン		○		○			○	16
17 十九夜様 (じゅうくやさま)		○		○			○	17
18 十三詣り (じゅうさんまいり)							○	18
19 高竿灯籠 (たかんどろうろう)		○		○	○		○	19
20 端午の節句 (たんごのせっく)					○		○	20
21 月見 (十五夜、十三夜)					○			21
22 付け木 (つけぎ)		○						22
23 天王祭 (てんのうさい)				○	○	○		23
24 栃木 (とちぎ) の正月			○		○			24
25 どんどん焼き				○	○			25
26 蜂 (はち) の子やイナゴを食べる			○					26
27 火伏せ (ひふせ)			○					27
28 ぼうじぼ、わらでっぽう				○	○			28
29 耳うどん			○		○			29
30 結 (ゆい)・結 (ゆい) がえし		○		○				30

☆のこしていききたい つたえていききたいことば

事例	(50音順)	ページ	事例	ページ
1 あったらもん		31	11 はっごこい	36
2 いかんべ、えかんべ、よかんべ		31	12 ぶんぬき	36
3 いしけ (え)		32	13 まさか、まさかさ	37
4 えんがみた		32	14 まぜる	37
5 お晩方 (ばんがた) です		33	15 みしみて	38
6 ごじゃっぺ		33	16 めめくる	38
7 こでらんない		34	17 もそい	39
8 そばえる		34	18 寄ってがっせ	39
9 だいじ		35	19 よばれる	40
10 ～なんしょ		35	20 雷様 (らいさま)	40

- 特別編：県民の歌 41
- ご協力いただいた方々、参考文献等 42
- あとがき等 43

安産を願う風習

県内各地には、安産を祈願するとともに、出産後にお礼参りをする昔からの風習があります。



勝願寺の地藏けやき（鹿沼市）



延生地蔵尊（城興寺 芳賀町）
（城興寺写真：「とちぎの百様」より）

～とちぎ人の想い～

私の母は、延生地蔵尊でお参りし、安産祈願をしました。双子である私たちを出産する時に、場合によってはどちらかを諦めなければならぬと言われていましたが、無事出産できました。私たちも、今ではそれぞれに子どもが生まれ、元気にすくすくと育っています。

〈安産を願う風習の例〉

- 勝願寺（鹿沼市）の地藏けやきには、二体のお地藏さまがまつられています。お地藏さまは、「子育て地藏」、「子さずけ地藏」と呼ばれており、身につけている赤いおかけを妊婦さんが授かり、出産の後には、赤ちゃんにそのおかけをつけて、健康を祈ります。その後、感謝を込めて赤い布でおかけを縫い、お礼参りとしてお地藏さんにつける風習があります。
- 延生地蔵尊（芳賀町）は、安産・子育ての守り神です。安産のお祈りをする時、御札が授けられますが、御札を挟んでいる竹に節があれば男の子、節がなければ女の子が生まれるといういわれがあります。出産の後には、お礼参りをします。
- 将棋の駒である「香車」を興雲律院（日光市）などへ納める人もいます。香車は、まっすぐにしか進めない駒であるため、赤ちゃんが産道をまっすぐに進んで安産になるようにとの願いが込められています。
- 妊婦さんやその家族に、打上花火殻を安産・子育てのお守りとして手渡す地域もあります。貰った人は、子どもが周りから祝福されて生まれてくることに感激をするようです。

あんばさま

茨城県稲敷市阿波いなしきし あばにある大杉神社おおすぎは、古くから「あんばさま」の呼び名で親しまれています。そこにまつられている神は、疫病えきびょうよけ、家内安全、海上・水上安全の神として各地に広がっていきました。

栃木県内においても、「あんばさま」は、大切な人の健康けんこうや安全を願う、とても身近な信仰といえます。

〈鹿沼市の「板荷のアンバ様」の例〉

板荷のアンバ様は、毎年3月第1土・日曜日に、大杉神社をかたどったおみこしをかついで地域内を回り、健康、家内安全を願う行事です。お神輿みこしは、普段おき納められている日枝神社ひえを出発すると、大杉ばやしにのり、大天狗てんぐ・小天狗・獅子などととも地域内全ての家を巡ります。

途中、厄払いやくばらいをする家では、大天狗・小天狗が「アンバ大杉大明神 悪魔あくま払ってヨイのヨイのヨイ」と大声を出して悪魔を払い、獅子がそれを食べるという儀式ぎしきを行います。

150年以上続く、板荷に春の訪れを告げる伝統的な行事です。



悪魔払いをする獅子

(平成6年 柏村祐司氏撮影 県立博物館提供)

〈大杉神社と「あんばさま」〉

昔、阿波あばのあたりで、伝染病でんせんが流行し、たくさんの方が苦しんでいました。そこを通りかかった旅のお坊さんぼうさん（勝道上人しょうどうじんの）が、「あんばさま」の宿しゆく大きな杉みわやまに願ったところ、奈良県の三輪山から神々（三神）が助けにやってきて、人々を病気から救いました。

それから阿波に、あんばさまと三神がまつられるようになり、それが大杉神社の始まりといわれています。

日光開山の祖である勝道しょうどう上人が、奈良県の三輪山から、栃木県の日光みやまをめざす旅をしていた時のお話です。

「あんばさま」は、ご神木である大きな杉やどに宿しているとされることから「大杉大明神」とも呼ばれます。

えびす講 (こう)

えびす講は、10月20日と1月20日に各地で行われるお祭りです※。神無月（10月の異称）に神々が集まる出雲に行かない「留守神」とされた、えびす様をおまつりし、一年の無事を感謝し、豊作、大漁、あるいは商売繁盛を願います。

※現在は、月遅れ（行事を1か月遅らせて行うこと）の11月20日に行事を行う地域もあります。

〈栃木県の「えびす講」の例〉

○西宮神社（足利市）

毎年11月19日に宵祭り、翌20日に本祭りが行われます。「えびす」と「ひょっとこ」が釣竿の先に福餅をつけて踊りながら見物人に糸を垂らす神楽が行われます。

○西宮神社（佐野市）

商人の商売繁盛、家内安全を願い、毎年11月19日・20日に行われます。「おたから市」が店を並べ、福引きやのど自慢、露店など夜遅くまで多くの人たちでにぎわっています。

各家庭では、10月20日と1月20日に祭壇へ恵比寿・大黒像をおまつりし、豊作や商売繁盛を願います。その際にけんちん汁やあんころ餅などのごちそうを作り、尾頭付きの魚、財布、小銭、そろばんなどを供える地域もあります。

〈えびす講の説明〉

えびす講は、神無月の留守神のえびす様にご利益をお願いするお祭りです。

全国各地で行われ、「えびす祭り」や「えべっさん」、「十日えびす」とも呼ばれます。

えびす様は、七福神のひとりで、商業・農業・漁業の全てを担当する神様として信仰され、一生懸命働くと、えびす様が福を与えてくれると考えられています。



1月20日えびす講の膳
(平成19年鹿沼市笹原田 県立博物館提供)

釜の蓋（かまのふた）

7月1日（または月遅れ^{おく}※1の8月1日）は、「釜蓋朔日^{かまのふたついたち}」と呼ばれており、「地獄^{じごく}※2の釜の蓋が開く日」とされています。栃木県では、お盆^{ぼん}に帰って来るご先祖様のために、釜の蓋が開くこの日に合わせて仏壇^{ぶつ だん}に炭酸まんじゅうをお供え^{そな}する風習があります。

※1 月遅れ=行事を1か月遅らせて行うこと。旧暦（1873年から使われた太陽暦に対し、それ以前に使用していた暦のこと。）を使っていた時代から続いている行事において、期日をずらすことで季節を合わせた。

※2 地獄=ここでは、「あの世」のこと。

【炭酸まんじゅうの作り方】(材料10個分)

- ・小麦粉^こ 200g
- ・重曹^{じゅうそう} 4g
- ・ベーキングパウダー 2g
- ・砂糖^{さとう} 60g
- ・卵 1個・日本酒 20cc
- ・水 20～30cc ・つぶあん 300g



- 1 小麦粉、重曹、ベーキングパウダーをよく混ぜておきます。(①)
- 2 砂糖、卵、日本酒、水をよく混ぜ合わせ、そこに①を入れよくこねます。
- 3 耳たぶくらいの硬さまでよくこねたら、生地を30分ほどねかせます。その間につぶあんを10等分に分けて、丸めます。
- 4 ねかせておいた生地を10等分に分けて丸めます。(②)
- 5 ②につぶあんを入れて包み、蒸し器で15分ほど蒸してできあがりです。

栃木県の方は、ご先祖様を大切に思っているまるね。



〈釜の蓋の説明〉

ご先祖様があの世から帰ってくるお盆（13日）に間に合うためには、釜の蓋が開く日に出発しなければなりません。

長い道のりを帰ってくるご先祖様のために、途中でお腹がすかないよう炭酸まんじゅうをお供えし、その後、みんなで食べるという風習が那須地方などで昔から続いています。このときお供えするまんじゅうを「釜の蓋まんじゅう」といいます。

他に、「13個の炭酸まんじゅうをお供えする」、「ご先祖様が迷子にならないようにお墓から家までの道のりにお供えする」などの言い伝えもあります。

炭酸まんじゅうは昔から各家庭で作られており、慣れ親しんだふるさとの味です。

ゆでまんじゅうやぼたもち、小豆飯^{あずき めし}を作って供える地域もあります。

川俣の元服式（かわまたのげんぷくしき）

日光市の川俣地区では、男子が数え年[※]20才の成人を^{むか}迎えると元服式を行います。これは、遠い親戚^{しんせき}などの中から、成人した後に様々な場面で世話をしてくれる親分を選び、親分・子分の関係を結ぶ^{ぎしき}儀式です。

500年以上も続く、人間関係を深めるための^{ならわし}で、国の重要無形民俗文化財^{みんぞく}になっています。

※数え年=生まれたときは1歳^{さい}で、次の正月が来ると1歳増えるという数え方。



手前が親分夫妻、向かいに新成人



親分・子分「固めの盃（さかずき）」



元服を祝って舞われる三番叟（さんばそう）と
夷大黒舞（えびすだいくくまい）

（写真：日光市提供）

〈「元服式」の様子〉

当日は、地区の住民が見守る中、^{もんつき}紋付^{はおりはかま}羽織袴で正装した新成人が、付け人を横に従え、親分夫妻と縁起物の料理（^{えんぎもの}下写真）を挟んで向かい合います。



親分・子分はやオチョウ・メチョウと呼ばれる小学生がついた「固めの盃」を飲み交わしたあと、「血肉を分けた深い関係になる」という縁起から、生魚を食べ分けます。



きどころ寝(ね)をしない

「きどころ寝」とは、茶の間など^{しんしつ}寝室以外の場所で、服も着がえず、少しの間寝てしまうこと。服を着たまま、所かまわず寝てしまう様子をいましめるものです。

〈こんな時に使います〉

ZZZ・・・



こんなところで
「きどころ寝」して
いないで、早く宿題を
終わらせなさい!

～とちぎ^{じん}人の想い～

ついつい寝てしまうきどころ寝。気持ち
がよいものですが、食事の後などにきど
ころ寝をしていると、親から「行儀^{ぎょうぎ}が悪い。」
「消化に悪い。」と注意されました。

〈きどころ寝の説明〉

畑仕事などで体が^{つか}疲れてくると、お昼
ごろひと休みしたくなるものです。ひと
休みした後は、再び仕事にもどるので、
着物を着替えず、家の中の適当な場所で
ごろっと横になります。野良^{のらぎ}着のまま少
しの時間眠ることをキドコロネ(着所寝)
というようになりました。

布団^{ふとん}に入らず、うつらうつらしている
とかげをひくこともあります。また、お
風呂^{ふろ}に入ったり、宿題をやったりするな
どの、本来やるべきことがおろそかになっ
てしまいます。

きどころ寝には、時間をむだにせず、
節度ある生活を大切にしたいという思い
が込められているのでしょうか。

すわっている場所に横になって寝てし
まう様子からイドコロネ(居所寝)とい
うところもあります。



義理（ぎり）に行く

知り合いから訃報^{ふ ほう}※を受けたとき、通夜・告別式の前に
 弔問^{ちようもん}をすることです。亡^なくなった方の家族に速やかに弔
 意^いを示し、悲嘆^{ひ たん}する相手方の心情^{しんじょう}に寄り添^そう意思を示す
 行い^いです。

※訃報＝人が亡くなった知らせのこと。

〈義理とは〉

昔^{たが}から互いに助け合う関係で成り立っているムラ社会において、道徳や慣習の基準となっていました。義理には、親子分関係、本家分家関係、親類関係などの個人的なもの、鎮守の祭礼、労働、葬式^{そうしき}、火事などのムラ全体にかかわるものに分けられます。中でも葬式と火事における義理は、人間関係をよくする上で大切にされてきました。

これらの義理には、御祝儀^{ごしゅうぎ}や年中行事、わら屋根のふき替え、田植え、稲刈り等の農作業で果たしたり返されたりしました。今でも、義理返し（ぎりがえし）ということばが残っています。

〈こんなときに使います〉

昨日の夕方、私の家に自治会長さんがやってきました。何だかとても悲しい顔をしていたので、母が

「どうしたのですか？」

と尋ねると

「〇〇さんちのおばあちゃんが亡くなったんだよ・・・」

と言いました。その知らせに母は大変驚いた様子でした。しばらくすると、母は黒っぽい服装^{ふくそう}に着替^かがえ、

「〇〇さんちに義理に行ってくるからね。〇〇さんちのおばあちゃんにはお世話になり、感謝の気持ちでいっぱいだよ。」
 と言って出かけました。

〈プラス1情報〉

訃報^{こうもん}を告げられ、香典^{そな}を供えることを「梅やみをつく」「義理を果たす」という地域もあります。

とちぎ人は、
 「義理がたい」まるね!



くされ鮎（ずし）

くされ鮎は、11月23日に宇都宮市の羽黒山はぐろさんで行われるぼんでんまつ梵天祭りの時に、祭りのごちそうとして食べられています。魚を米と塩にゅうざんはっこうで乳酸発酵させたもので、塩漬しおづけにした魚のにおいが強いものの、珍しい「酒のさかなめずら※」としても食べられています。

※酒のさかな＝酒を飲むときの、つまみ。

【鮎のくされ鮎の作り方】

- 鮎を夏に仕込みます。背割りして内臓ないぞうを取り出し、塩漬けにします。
- 米を炊きます。
鮎は、背びれと尾びれを取って、一口大に切ります。
大根は、千切りにして、塩をまぶし軽く混ぜておきます。
- 炊きあがったご飯は水でよく洗い流し、ねばりけを取り除きます。
- 鮎、大根、ご飯をよく混ぜ合わせます。
- よく混ぜ合わさったものを桶おけにきっちり詰めて、一番上に塩漬けした鮎ずかたを姿のまま並べます。
- 落としふた（重石）を乗せて1週間くらい発酵させます。その後、桶を逆さにし、2日間くらい重しを乗せて水を切ると出来上がりです。

魚を長い間食べる工夫だったまる。



＜くされ鮎の説明＞

くされ鮎はもともと、鬼怒川流域きぬがわの小倉地域くらちいきなどを中心に、鮎あゆやドジョウなど川から捕れる魚を保存するために作られた伝統料理です。

その後、梵天祭りにあわせて作られるようになり、祭りのごちそうになりました。

くされ鮎は、ご飯の自然発酵によってできた乳酸により魚に独特のうまみがついたもので、魚を長期間保存することができる人々の知恵がこめられた料理です。



鮎のくされ鮎
(ほたるの里 梵天の湯提供)

こじはん

食事と食事の間のちょっとおなかがすいたときに食べる間食のことを、「こじはん」といいます。農作業の合間に、いっしょに作業をしている家族や^{ち い き}地域の人が^{きゅうけい}休憩とともに集まって、みんなでとることもありました。

〈こんな時に使います〉

○農作業中の人が・・・

「はあ、くたびれたから、
こじはんですっぺ。」

○^{せんてい}植木剪定の職人さんに、
休憩時間にうどんを出したとき・・・

「こりゃ、おれらには
こじはんだな。」

○農作業の休憩を進めるとき・・・

「こじはん、あがって。」
(ちょっとした食事を用意したから
食べて。)

～とちぎ人の想い～

- ・「こじはん」は、カ仕事や農作業を行う人たちに、「お疲れ様です。」「ありがとう。」といったねぎらいや感謝の気持ちを込めて出しました。
- ・子どもの頃、畑に^{すわ}座って、みんなでいっしょに大皿にのったおにぎりを食べたことを思い出します。

〈こじはんの説明〉

カ仕事をする農家の人たちは、おにぎりや漬け物、飲み物などを準備して畑や田んぼに出向き、作業が一段落したときや一休みするときに、みんながいっしょに「こじはん」をとっていたそうです。

「こじはん」には、おにぎりなどの主食になるものや^{さといも}里芋、じゃがいも、さつまいもといった芋類や漬け物などを食べました。

言葉の由来は、小さな昼食（軽い昼食）を表す「小昼飯」が変化したものだといわれています。



事八日（ことようか）

2月8日と12月8日を総称して事八日そうしょうといひます。2回の事八日は、正月行事の始まりと終わりの日とも考えられています。コトは神事かみごとのことで、主に神々の送迎そうげいに関わるものです。栃木県では、疫病神やくびょうがみが訪れる日といわれ、これを追い払はらう行事が各地で伝承されていました。

メカイをかかげる

(平成十三年鹿沼市笹原田
県立博物館提供)

～とちぎ人の想い～

70年くらい前は、十分に好きな物を食べられない時代でしたが、事八日には赤飯や魚のごちそうが食べられたので、楽しみでした。

〈プラス1情報〉

- コゴト（小言）の始まり、終わりの日ともされています。
- 7日の夜には、履物はきものをきちんとそろえておかないと、「疫病神に印を押される」ともいわれています。

〈事八日の説明〉

事八日は、ダイナマコという一つ目の疫病神たげさかがやってくる日とされ、竹竿たけざおの先に目（マナコ）のたくさんあるメカイ（目籠めかご）をつけて家の軒先に立てかけたり、ニンニクや豆腐とうふを串くしにさして戸口に置いたり、また、草刈籠くさかりかごをさかさにして門口に置いたりしました。

さらに、「笹神様」といって笹を3本ささ がみさま束ねたものを庭に立て、束ねたところたばにうどんやそば、小豆飯などを供えた地域もありました。この行事は、栃木県や茨城県にしか見られない行事で「北関東のササガミ習俗」として国の文化財に選択されています。

また、この日は針供養はり くようの日でもあり、針はりを使う仕事たがさに携たがさわる人さいほうや裁縫さいほうの技術そなを覚おえる人たちにとっては、針仕事を休む日でした。

サガンボ、モロ

栃木県では、サガンボやモロといわれる魚を煮付けにして食べる風習があります。サガンボはアブラツノザメ、モロはネズミザメのことです。茨城県北部や福島県、宮城県沖で獲れたものを購入しました。

〈どうしてサメを食べているの?〉

サメは、体の中に尿素を蓄えており、命が尽きると尿素が分解しアンモニアができます。そのため腐りにくなります。

そこで、海の新鮮な魚に恵まれなかった内陸地方では、腐りにくいサガンボやモロが数少ない海の魚として伝わり、食材に利用されてきました。

〜とちぎ人の想い〜

サメを水揚げする港周辺では、サメ肉の人氣がなく、あまり食べないと友人が言っていました。そのような食材も大切にいただくことは、「もったいない精神」と言えるかもしれません。

モロフライは、とちぎの子どもたちも給食で食べているまる☆☆



〈「サガンボ」名前の由来〉

アブラツノザメ（サガンボ）の、頭部を切り取った胴部の形は、ツララに似ています。ツララのことを栃木県ではサガンボといいます。サガンボはそのことからついた呼び名といわれています。

〈おすすめの食べ方〉

【サガンボ】

切り身を砂糖醤油で煮込んで食べます。一晩おいてできた煮こごりもおいしいといわれています。

【モロ】

フライや煮付けにするとおいしいようです。モウカザメ（宮城県の方言）などの名で、切り身を売っていることもあります。



サガンボの煮付け
（「実生」（宇都宮市）提供）

サナブリ

田植えが終わった後に、手伝ってくれた人たちをねぎらい、美味しい料理を食べたりお酒を飲んだりする慰労会いろうかいのことをいいます。家族や手伝った人たちが飲食を共にし、無事に田植えが終わったことを祝いました。

〈サナブリの説明〉

田植えは、今では機械化が進み、少ない人数でも作業することができます。しかし、昔の田植えは、苗代作りなわしろから田植えが終わるまで大変な忙しさでした。

特に、手で植える田植えは、長時間、こし腰を曲げた状態で作業を続ける重労働でした。したがって、田植えは多くの人手を必要とし、家族や近所など総出で行う集落あげでの共同作業となっていました。

サナブリは、田植えが終わって一段落ついた束の間の息抜きの日でもありました。農作業を休む日としていた地域もあります。

各家庭で行うもの（コサナブリ）と、集落全体で行うもの（オオサナブリ）があります。食べ物も、かしわ餅かしわもちやあんころ餅あんころもち、炭酸まんじゅうを作るところや、各家庭料理を持ち寄るところなど、地域や家庭によって様々です。



田植え

（昭和 48 年宇都宮市篠井地区
柏村祐司氏撮影 県立博物館提供）

〈サナブリでは道具に感謝も！〉

オオサナブリの時には、田植えに使用した農具をきれいに洗い、お神酒みき※を供え、田植えが無事に終了したことに感謝をしました。そして、豊作を祈りました。

※お神酒＝感謝や願いを込めて、神様に供えるお酒。

家族や親戚しんせき、近所の人たちがお互い助け合って田植えをしていたまるね。サナブリで、人と人のつながりをより強めていたまるね。



敷居（しきい）をふまない

最近では、出入り口がドアの家が多くなってきましたが、昔はほとんどの家が引き戸で、敷居がありました。

「敷居は親（主人）の頭だからふんではいけない」、「敷居には神様がいらっしゃるからふんではいけない」などといわれ、敷居はふまないでまたぐように教えられてきました。



出入り口の敷居（益子町 大山栄氏宅）



敷居の他にも、「畳のへり」をふんではいけないというマナーがあります。

〈“敷居をふまない”の説明〉

敷居をふんではいけない理由にはいくつかあるようですが、そのひとつとして、敷居が汚れたり、すり減ったりすることで、戸の開け閉めがしにくくなるを防ぐためだったということがあげられます。そこで、ふむことができない「親の頭」や「神様」を敷居にたとえて、「敷居をふんではいけない」と教えたのでしょう。

また、家の出入り口の敷居には、外の世界とその家の世界の境界を表すという考え方があり、大切な場所とされていました。

敷居をふまないで入るようにするのはもちろんですが、他の家を訪問したときなどは、家に入る前にくつの汚れを落としたり、身だしなみを整えたりするのも大切なマナーですね。

敷居はふまないで、
またぐまる！



ジブ

昔、日光市の^{くりやま ち いき}栗山地域では、^{かんたん}簡単に物が手に入らなかったため、着物がすり切れてもすぐ捨てず、他の古くて着られなくなった衣服の一部を切り取って、あて布としてぬい合わせることで、最後まで大切に使い続けました。

そのことをくり返していくうち、たくさんのつぎ当て^{も よう}が模様のようなになった着物を「ジブ」といいます。

^{くりやま ち いき}栗山地域の湯西川に伝わる「ジブ」



(画像 小山市立博物館第 71 回企画展図録より)

これは、そでの形が“モジリスッポ”とよばれる、男性が冬の仕事着として着ていた「ジブ」です。そで口が小さいので温かく、かつ、たもとが三角に折り曲がっているため、じゃまになりません。寒い冬、家の中で座り続けて仕事をする時に使っていたため、何枚も布を重ねたり丈を長くしたりしていました。

もとの布地が分からないくらいたくさんの小さな布でつぎ当てがされ、物を粗末にせず、大切にしようとする心が表れています。

〈“栗山”ってどんなところ?〉

江戸時代、栗山は、湯西川・^{かわまた の かど}川俣・野門・^{どうぶ くるべ ひがけ ひなた}上栗山・土呂部・黒部・日蔭・日向・西川の九つの村からなっており、「栗山郷」といわれました。

高い山に囲まれ、冬は厳しい寒さや深い雪のため、他の町や村との行き来は大変でした。

そのため、生活の仕方やことばにも、それぞれの村ならではの形があったといわれています。

～とちぎ^{じん}人の想い～

栗山地域の日向の『ジブ』には、女性が^{ふだん ぎ}普段着として使うものがありました。すり切れた部分に、^{あさ も よう ししゅう}麻の葉模様の刺繍をしたり、自分の好みの布をあて布に使ったりして、おしゃれを楽しむ気持ちも忘れませんでした。

^{さいたくかい ご し えん しせつ}＜在宅介護支援施設ひだまり

(日向地区)の皆さんより>

しもつかれ

はつま 初午（2月最初の午の日）は、豊年を祈る稲荷神社の祭りの日であり、栃木県では、しもつかれを作る風習があります。正月の塩引き鮭の頭、節分の大豆、大根やニンジンなど、その季節に手に入る食材を煮込んだ料理で、食べ物をむだにしない文化として伝わっています。



赤飯としもつかれ

（平成 22 年鹿沼市笹原田 県立博物館提供）

～とちぎ人の想い～

- ・「しもつかれ」ということばを聞くと、“ふるさととちぎ”を思い出します。
- ・初午には、稲荷神社に赤飯と「しもつかれ」をお供えしていました。



鬼おろしで大根をおろす
（平成 22 年鹿沼市笹原田 県立博物館提供）

〈しもつかれの説明〉

「しもつかれを7軒食^{ちゅうふう}べると中風※にならない」といわれるほど、栄養満点の料理です。（3軒、5軒というところもあります。）

また、「各家庭によって味が違う」といわれ、お互いに味比べとして交換する風習もあります。

学校給食のメニューになっている地域もあります。

鮭の頭は正月に食べた鮭、大豆は節分に煎った福豆など、その季節に手に入る食材を使って作られたしもつかれは、「食べ物を無駄にしない」栃木県人の知恵が生みだした優れた郷土料理といえます。

※中風＝脳内出血などの病気。

しもつかれで使う
大根やニンジンは、
「鬼おろし」で
おろすまるね☆☆



ジャンボン

お葬式そうしきのことです。大切な人が亡なくなったときに、人々は、その人のことを思ったり、様々なことを願ったりします。ジャンボンの儀式ぎしきには、亡くなった人への敬愛けいあいを込め、多くの地域ちいきの人々が関わって行われてきました。



のべおくり
野辺送り

(昭和 47 年宇都宮市
柏村祐司氏撮影 県立博物館提供)

～とちぎしん人の想い～

昔は、地域の人たちみんなで役割を持って、協力してジャンボンを行っていました。とても遠くまでジャンボンツカイをして、お疲れ様でしたと感謝されたことを覚えています。

大切な人が亡くなることは、とても悲しいことまる。地域に住んでいる人みんなが、亡くなった人のことを思っていたまるね。



〈ジャンボンの説明〉

ジャンボンという呼び方は、ミョウハチ（シンバルのような形の仏教で用いる楽器）の音が「ジャランボーン」と聞こえるからといわれています。

地域によっては、ジャンポー、ジャーポー、ジャアボ、ジャンボなど色々な呼び方があります。

ジャンボンは、地域の人がお葬式そうしきや葬列れつに参加するだけではなく、墓はかの穴を掘ることや、棺ひつぎを運ぶこと、死者の服装を作ること、食事の準備をすることなどが含まれ、地域全体で、死者の霊魂れいこんを送り出す風習でした。

親戚しんせきなどに亡くなったことを知らせに行く人を、ジャンボンツカイといいます。ジャンボンツカイは、確実に伝えることができるように二人一組で出かけました。

十九夜様 (じゅうくやさま)

十九夜様は、女性の守り神です。19日に地域の人たちが集まって十九夜様をまつり、地域内の女性の安産を祈った風習で、今も続いているところもあります。県内には、各地に十九夜様の石仏を見ることができます。



十九夜様

(昭和46年宇都宮市岡本)

柏村祐司氏撮影 県立博物館提供)

～とちぎ人の想い～

私の地区では、年に一度ですが、ふたまたの杉の木を塔婆(祈りの文字が書かれたもの)にして、酒、米、削り節、塩、線香といっしょに十九夜様にあげます。昔は女性だけの参加でしたが、今は、男女の別はなく、地域の各家に参加が呼びかけられます。これからお産する人たちの無事を地域のみなさんで祈るものであり、これからも続いてほしいです。

〈十九夜様の説明〉

月の満ち欠けが約30日で1周するので、昔は月の動きに合わせて1か月間を決めていました(旧暦という)。

そのため、月と人々の生活の関係は深く、月に願いや感謝の思いを込めた行事を行ってきました。

栃木県内では、旧暦の十九日は、回り番の当番の家に地域の女性が集まって安産を願いました。そのなかで、「十九夜様の石仏の前に供え物をする」、「まつる場所に塔婆を立てて祈る」、「月が出るまで念仏を唱え、飲んだり食べたりする」などしました。

「十九夜様」は、日ごろから家事や子育て、農作業に忙しかつた女性たちの楽しみとして、飲んだり食べたり、世間話に花を咲かせたりした日でもありました。



地域の人たちが語り合い、絆を深めた行事だったまるね。

十三詣り（じゅうさんまいり）

十三詣りは、数え年^{さい}※で 13 歳になった子どもたちが、茨城県東海村や福島県柳津町などにある虚空蔵さまにお参りに行くしきたりのことです。

子どもから大人になるための大切な行事といわれており、「智恵詣り」や「知恵貰い」などといわれています。

※数え年＝生まれたときには 1 歳で、次の正月が来ると 1 歳増えるという数え方。

〈十三詣りの説明〉

十三詣りは、知恵と福德を備え持つ虚空蔵菩薩に「一代開運」をお祈りすることです。

数え年の 13 歳は生まれ年の干支が初めて戻ってくる、いわば「十二支の還暦」にあたります。この歳は男女とも人生最初の厄年であり、同時に、身も心も大人に生まれ変わる大切な年齢です。昔はこのころから心身ともに成人らしくなるということで、このとき初めて大人用の着物を作ってもらい、女子は「本身祝い」、男子は「元服祝い」、「若衆入り」をしました。

十三詣りをする地域は、特に栃木県東部の八溝山麓地方に色濃く残っています。茂木町や旧烏山町（現那須烏山市）では、舟に乗って那珂川を下り、お参りに行ったと伝えられています。

東海村の村松山の虚空蔵さまの境内で売られている菓子 13 個を食べると、福德知恵が授かるという言い伝えもあります。



むらまつやまこくそうどう
村松山虚空蔵堂 本堂（茨城県東海村）

～とちぎ人の想い～

十三詣りは、お参りしたことしか覚えていませんが、こうした記憶があることは、私が健康で幸せに成長するように家族がひたすら祈ったからだと考えています。親や家族の心を懐しく思い出すことで、ありがたくも幸せな気持ちになります。

子どもへの思いが
伝わってくるまる。
「幸せな気持ち」に
なるまる～。



高竿灯籠（たかんどろう）

はつぼん むか
 初盆※を迎える家のご先祖様が、迷わずに自分の子や孫
 が住む家に帰ることができるよう、遠くからでも見える
 目印として高い竿さおの先とうろうに灯籠とうろうをとりつけたものです。

※初盆＝人が亡なくなって四十九日を過ぎてから初めて迎えるお盆のこと。
 新盆（あらぼん、にいぼん）ともいいます。



庭先に立てられた高竿灯籠
 （平成 22 年大田原市湯津上 県立博物館提供）

～とちぎ人の想い～

「釜かまの蓋ふた」が開くと、ご先祖様の13日間
 の旅が始まります。

トウロウに明かりをつけておきますから
 迷わず帰ってきてくださいね。

亡こくなった人を思う気持ちか
 込められているまるね～。



〈高竿灯籠の説明〉

灯籠を高くかかげる風習は古くから行
 われているようで、鎌倉時代かまくらに書かれた
 本（『明月記』）には、京都で高灯籠たかんどろうが使
 われた記録が残っています。

昔は、丸太が使われていたようです
 が、今では、竹竿で作ることが多いよう
 です。竹竿の先には、杉すぎの葉で三角矢を
 つけます。竹に、亡こくなった人の歳ちいさの数
 だけ縄で作った輪を巻き付ける地域もあ
 ります。

以前は、小さな滑車かっしやとひもを使って灯
 籠を上げたり下げたりしたようですが、
 今では多くの家では電気で明かりをとも
 しています。

コウカトウロウ、タカトウロウなど地
 域によって様々な呼び方があります。

県の北部から東部（芳賀郡や那須郡、
 塩谷郡を中心）にかけて、現在でも作ら
 れています。

端午の節句（たんごのせっく）

端午の節句^{*}は、5月5日にあたり、菖蒲^{しょうぶ}の節句ともいわれます。また、菖蒲を尚武（しょうぶ）という言葉にかけて、勇ましい飾りをして男の子の誕生と成長を祝います。

※節句＝1年のうち、季節の変わり目に、願いを込めてお供え物などをする行事。

人日の節句（1月7日）、上巳の節句（3月3日）、端午の節句、七夕の節句（7月7日）、重陽の節句（9月9日）の5つがあります。

〈鯉のぼりと武者絵のぼり〉

鯉は、とても生命力の強い魚です。また、鯉が急流を登ると竜となって天を登るという中国の伝説にちなんで、子どもの立身出世を願って江戸時代ごろから「鯉のぼり」が飾られるようになりました。

地域によっては、鯉のぼりといっしょに「武者絵のぼり」を立てます。勇ましい武者が描かれた武者絵のぼりも、子どもの健康と成長を願って立てられるものです。

栃木県内でも作られてきました。なかでも、市貝町の「大畑家の武者絵のぼり」、佐野市の「佐野武者絵のぼり」は、県の伝統工芸品となっています。



〈鯉のぼりを上げてはいけない里がある〉

「平家の落人伝説」で有名な日光市湯西川地区。昔、戦に敗れて逃げた一行が、男の子の誕生を祝い鯉のぼりをあげたところ、追っ手に見つかりひどい目にあったとの言い伝えから、現在もこの地域では鯉のぼりをあげない風習が残っています。

〈端午の節句の説明〉

端午の節句は、奈良時代から続く古い行事です。

もとは月の端の午の日という意味で、5月に限ったものではありませんでしたが、午〔ご〕と五〔五〕の音が同じなので、毎月5日を指すようになり、やがて5月5日のことになったと考えられています。

この日は、厄をはらう菖蒲を家の軒先につるし、湯に入れて菖蒲湯にして入浴しました。

江戸時代になると、菖蒲と尚武をかけて、身を守る鎧や兜を飾り、こいのぼりを立てて男の子の成長や立身出世を願ってお祝いをするようになりました。

月見（十五夜、十三夜）

秋になると空気がすんで、月が美しく見えるようになります。特に、美しいといわれてきたのが十五夜（旧暦※8月15日）と十三夜（旧暦9月13日）の月です。この日には、月がよく見える縁側などに台を用意し、ススキや団子、季節の野菜やくだものなどを供えます。そして、美しい月をながめ秋の実りに感謝しました。

※旧暦=1873（明治6）年から採用した太陽暦（新暦）に対し、それ以前に使用していた太陰太陽暦のこと。

ススキをかざり、箕という農具に団子などをのせています。



拡大すると

縁側に用意された十五夜の供え物
（平成19年 那珂川町 県立博物館提供）



に煮物
（里芋など）

季節の
くだもの

赤飯

団子

〈月見の説明〉

旧暦では、7月から9月が秋となり、8月15日はちょうど秋の真ん中の日なので、十五夜の月を「中秋の名月」と呼んでいます。

十五夜と十三夜には、ススキ、団子、季節のくだもの（カキ、ナシ、クリなど）を供えるほか、地域によって、けんちん汁を作ったり、サンマを食べたりする独特の風習もあります。

また、栃木県では、けんちん汁に里芋を入れるのが一般的で、十五夜には「芋名月」の別名もあります。ちなみに十三夜は「栗名月」とも呼ばれます。

実りの季節を迎え、月見には収穫に感謝したり、豊作を祈ったりするという意味も込められています。



とちぎの月見は、ススキと団子をかざって、里芋が入ったけんちん汁を食べるまる！

付け木 (つけぎ)

近所から、重箱に入った赤飯や餅^{もち}などをもらうと、その重箱を返すときに、ちょっとしたお礼を付けることがあります。そのお返しのことを「(お) 付け木」といいます。

〈こんなときに使います〉

○子どもが隣^{となり}の家に届け物をしたとき

「おばあちゃん、うちのおばあちゃんが赤飯を作ったから持ってきたよ。どうぞ。」

「あら、まあくん、ありがとうね。付け木あげるから、まあくんが重箱取りに来てちょうだいね。」

(次の日)

「おばあちゃん、重箱取りに来たよ。」

「まあくん、ありがとう。…はい、これ付け木だからね。」

「うわあ、キャラメルだ! ありがとう、おばあちゃん。」

ぼくは、付け木にいちごをもらったまる☆☆



〈付け木の説明〉

「付け木」とは、薄く割った板の先に硫黄^{いおう}を付けたもの。起こした火をほかのものに移すときに使いました。

※硫黄：火薬に使われる原料。
医薬品にも使われる。



付け木

いただいたことに感謝をする気持ちを込めて、容器を返すときに「付け木」を付けました。やがて、付け木の代わりに「マッチ」を付けるようになり、転じて、お菓子などをあげるようになりました。そして、お返しに付けるものを「(お) 付け木」というようになりました。

特に、子どもが使いで来たときには、子どもが喜ぶキャラメルやお駄賃^{だちん}をあげて、仕事をしてくれたことへの感謝を伝えました。

天王祭（てんのうさい）

えきびょう 疫病が流行する夏に、たいさん きがん 疫病退散を祈願して行われるお祭りです。病気の流行を防ぐために、神輿を荒々しく担ぎまわったり、だし やたいばやし 山車や屋台囃子が出されたりするのが、このお祭りの特徴の一つです。とくちょう 栃木県内でも「夏祭り」として各地で行われています。



喜連川天王祭
(昭和後期 県立博物館提供)

「天王祭」が始まると、
「夏が来た!」と感じるまる☆☆
大人も子どもも、
みんなが楽しみにしている
お祭りまるね☆☆



〈天王祭の説明〉

天王祭のほか、「お天王さん」、「祇園祭」、「八坂祭」と呼ぶところもあります。

「喜連川天王祭」のあばれ神輿は、観衆にぶつかりそうな勢いで神輿をくねらせて進むのが習わしです。また、昔の大名行列を再現した「百物揃い」も見所の一つです。

益子町の「八坂神社祇園祭」では、祭られた神様は女性といわれ、神輿の担ぎ方もしとやかだといわれています。

各地域に伝わる夏祭りは、疫病退散を祈願することに加えて、地域の人たちのつながりや地域の伝統を守ってこうという想いを育んできました。

ユネスコ無形文化遺産に登録された那須烏山市の「山あげ行事」も、この流れをくむものです。

栃木（とちぎ）の正月

正月は、一年のうちで益行事と並ぶ大きな節目となる年中行事です。年の初めの一月一日から三日までを「大正月」と呼び、正月の神様を迎える大切な時期とされています。各家庭では、その準備のため、餅をつく、門松を立てる、しめ縄を飾るなどするほか、様々な風習が引き継がれています。

<プラス1情報>

○若水汲み

昔は、新年初めの仕事は水汲みでした。家長である男性が年男となり、水の汲み初めである「若水汲み」をしました。1年の初めの水は特別の力があると考えられ、その水を沸かしてお茶を入れ、神仏に供え、家族で飲みました。

○正月の三が日は、女性は休み

正月の三が日には、男性が正月の仕事を行うことになっていて、日ごろ炊事を行っている女性の休日といわれていました。

○年始めの食べ物

正月にはおせち料理、七日には「七草がゆ」、十五日には「小豆がゆ」、二十日には「お汁粉」といったように、縁起をかついたり、健康を祈ったりして食べるように伝わってきたものがあります。



<正月の餅について>

正月は神様がやってくると信じられていて、それぞれの家では正月の神様（歳神という）を迎えるための準備を行います。

餅つきも正月準備として欠かせないものです。歳神様への供物である鏡餅や食用の餅つきを行います。餅つきを行う日は地域によって違いますが、「苦（九）餅はつくな」、「一夜餅はつくな」といわれ、二十九日、三十一日は餅つきをさけました。

正月餅は、白餅、うすく伸ばして切った切り餅をはじめ、栃木県では豆（大豆や落花生）を入れた豆餅、青のりを入れたのり餅などをつく家もあります。

元日の朝は、切り餅、里芋、大根、ニンジン、ゴボウ、ネギなどの野菜を入れ、しょうゆ油で味付けした雑煮を食べる家庭が多いようです。また、正月には食べ物に関する家庭での風習もあり、餅を食べない家庭もあります。

どんどん焼き

竹、もみの木、^{わら}藁などで仮小屋を作り、子どもたちが、1月14日^{*}に各家庭をまわって集めた正月の松飾りなどをその日の夜か1月15日に燃やす行事です。松飾りといっしょに「まゆだま」と呼ばれる^{だんご}団子をもらい、これをその火であぶって食べます。この団子を食べるとかぜをひかないといわれています。

※最近では、1月の第2土曜日などと地域で決めて行われています。



まゆだまをあぶる子どもたち
(平成18年鹿沼市 県立博物館提供)

～とちぎ人の想い～

私の地区では、毎年1月15日前後の土日を利用して田んぼで行います。子どもたちが地区内の正月飾りを集めて回り、育成会の大人が軽トラックに積んでいきます。子どもが来た家では、子どもたちの代表にお年玉を渡します。育成会、婦人会、^{ちやうじゆ}長寿会、消防団、自治会が分担して行事を支えています。地域の人がつながって行われる恒例行事です。

〈どんどん焼きの説明〉

正月三^{さん}が日^{にち}を大正月というのに対して、1月15日を中心とした3日間を小正月といい、^{あくえき}悪疫・^{やくじん}厄神の侵入を^{しんにゆう}防ぎ、^ご五穀豊穰、^{こさず}子授けを^{いの}祈るなど、様々な行事が行われています。どんどん焼きは、小正月の代表的な行事の一つであり、全国的には左義長（さぎちょう）とも呼ばれています。

^{こよみ}暦が^{こよみ}発達する前は、満月が一番目立つ日であり、この満月を中心に重要な行事を行っていました。そもそも、どんどん焼きが行われる小正月や、夏のお盆、十五夜は満月の日の行事でした。

県内では、古くは「トリヤキ」、県東地方では「ハーホイ」、日光では「ドーロクジン」などと呼ばれていました。

蜂（はち）の子やイナゴを食べる

はちの子とは、クロスズメバチなどの幼虫ようちゅうのこと。イナゴはバッタの仲間で、田んぼなどでよく見かけます。これらの生き物は、貴重なタンパク源たんぱくげんとして食べられてきました。

イナゴ、つかまえた！



（大田原市佐久山地区
公民館提供）

つかまえたイナゴは、このようなネットや布でできた袋に入れます。

〈学校行事のイナゴとり〉

大田原市立福原ふくはら小学校では、学校行事でイナゴとりを行っています。毎年9月下旬から10月上旬の間に、稲刈りいねかを終えた田んぼで地域の方々といっしょに行う名物行事になっています。

つかまえたイナゴは、高学年の児童が地域の方といっしょに調理をして、全校給食で出されます。児童も地域の方々も、毎年この伝統行事を楽しみにしています。

地域の人たちといっしょにイナゴとりをしたり、料理して食べたりできるなんて、楽しいまるね。



〈貴重なタンパク質〉

蜂の子やイナゴなどを調理して食べる文化があるのは、主に山間部の地域で、魚や肉があまり流通していなかったころは、貴重なタンパク源とされていました。

栃木県でも、以前は田んぼでイナゴとりをしている光景がよく見られるなど、虫を食する文化はそう珍しいものではありませんでしたが、食生活等の変化に伴い、虫を食べる機会は減ってきています。

主な調理方法としては、イナゴは佃煮つくだににします。調理前に足や翅はねを取り除くと、口当たりがよくなります。

蜂の子は油でさっと炒めいた、醤油しょうゆやみりん、砂糖さとうなどで味付けをして食べるとおいしいです。

最近かんづめは、調理された物が缶詰びんづめや瓶詰などで売られています。

火伏せ（ひぶせ）

火伏せは、火災を防ぐことをさします。昔の家は、木造で、草ぶきの屋根※となっていたので燃えやすく、火事は大変恐れられたものでした。そのため、火災を防ぐためのおまじないをする風習が多くあります。

※草ぶきの屋根＝わらなどの草で覆われた屋根。

〈火伏せの説明〉

料理をする、暖を取るなど、「火」は、生活していくためには欠かせないものですが、火事になると大変なことになる、恐ろしいものでもあります。

昔は、家も燃えやすく、火を消す設備も十分に整っていなかったため、一度火事が起きるとなかなか火が消えませんでした。

そのため、人々は神仏に祈ったり、おまじないをしたりして、火事を出さないように気を付けました。

火事は、現代でも十分に気を付けなければいけないことです。

乾燥が激しい季節になると、消防車が鐘を鳴らしながらゆくり地域を回ったり、自治会で拍子木を鳴らしながら声高らかに「火の用心!」と呼びかけていたりして、各地域でも火事に気を付ける意識を高める運動をしています。



〈“火事を出さないように”

おまじないの例〉

- 火事を防ぐ神仏の社寺（例えば古峰神社、愛宕山神社など）のお札を貼る。
- 屋根の煙が出るところなどに「水」や「龍」の文字を書く。
- 十二月十二日に十二歳になる子どもに「十二月十二日火の用心」と書いてもらった紙を貼る。
- おかま様（火をつかさどる神として、かまどや台所にまつられる神）をまつっているしめ縄を取り外し、屋根をふき替えるときにその縄を屋根に納める。

～とちぎ人の想い～

昔、小さい半紙に「十二月十二日」と書いて、火を使う周辺の柱に貼りました。一日一日を「火に用心」して過ごせるように行うものだと、伝え聞いてきました。

ぼうじぼ、わらでっぼう

子どもたちが、「ぼうじぼ当たれ、そば当たれ」などとかけ声をかけながら、わらで作った棒^{ぼう}※1で地面をたたいて歩き、各家を回ります。その年の豊かな実りへ感謝し、来年の五穀豊穡^{ごこくほうじょう}※2を祈る行事です。

※1 わらで作った棒=県の南部では「わらでっぼう」、県の中央部では「ぼうじぼ」、県の北部では「豊年棒（ほうねんぼう）」という呼ばれ方があります。

※2 五穀豊穡=作物が豊かに実ること。



ぼうじぼでたたく

(平成 28 年さくら市蒲須坂 県立博物館提供)

～とちぎ人の想い～

- 声の掛け合いが楽しかったです。
- ご褒美がほしくて、大きな声でさげびました。

自然の恵みに感謝して、
地域の人ともっと仲良くなれる、
すばらしい行事まるね～。



〈ぼうじぼの説明〉

県内各地で十五夜や十三夜などに行われてきました。かけ声は、地域によっていろいろあるようです。

「十五夜のわらでっぼう、大麦当たれ、小麦当たれ、三角畑のそば当たれ」、「ぼーちぼたれ山芋」などと唱えながら家々を回ります。

地面を打つことによって、作物に害をあたえるモグラを退治できるといわれており、近所の家をまわると、ご褒美にお菓子やお駄賃がもらえます。

打ち終わったら、柿の木にかけておき、たくさん柿が実ることをお祈りしました。



〈下野かるた『つ』より〉

耳うどん

正月に食べる^{きょうど}郷土料理です。この耳は、^{おに}鬼の耳、悪い^{あくま}神様の耳、悪魔の耳といわれており、これを食べれば鬼などに悪い^{むびょうそくさい}うわさが聞こえず、一年間無病息災で過ごせるといわれています。



耳うどん

～とちぎ人の想い～

わが家では、お正月に^{さの やくよ だいし}佐野厄除け大師にお参りに行った後、お店で^{えん ぎもの}縁起物の耳うどんを食べて、家族で^{むびょうそくさい}無病息災を願うのが習慣です。

耳うどんを食べて、一年間
元気ニコニコで過ごすぞ～。



〈耳うどんの説明〉

切り分けた小麦粉の生地を折りたたんで、耳の形にしたうどんです。

旧葛生町（現佐野市）では、年の暮れになると耳うどんを作り、ゆでて冷水に^{ひた}浸しておき、正月に^{あいさつ}挨拶に来るお客さんに^{ふるま}振る舞いました。次々とやってくるお客さんに手間のかかる料理を準備するのは大変なため、手軽に作れる耳うどんはちょっとした生活の知恵だったともいえます。

最近では、正月に限らず、年中食べられています。

〈プラス1情報〉

昔から小麦の生産が盛んだった栃木県では、よくうどんが食べられてきました。近年は、家庭でうどんを作ることは少なくなってきたかもしれませんが、歯ごたえやつゆの味付けなど、家々には独特の「家庭の味」が伝わっています。

結（ゆい）・結（ゆい）がえし

昔は、田植えなど、人手のいる大変な作業を行うときには、^{ちいき}地域の人がお互いに^{たが}労働力を提供し合う、「結」という仕組みがありました。「結」で自分の家が助けてもらったら、「結がえし」といって助けてもらった家の仕事を労働力でお返ししました。



結による田植えの様子
(大正時代頃 高根沢町
阿久津眞氏撮影 県立博物館提供)



結によるかやぶき屋根のふきかえの様子
(昭和期 那須塩原市 (旧西那須野町)
那須塩原市那須野が原博物館提供)

〈結・結がえしの説明〉

栃木県では、「ゆい」がなまって「よい」、「えい」、「よいどり」と呼んだり、県南地区(小山市など)では「イツパカ」、「イシゴト」などと呼んだりしました。

田植え、^{いね}稲刈りの他にも、^{あさ}麦刈り、麻の種まきなども結で行うことができました。

田植えなどの結では、必ず近日中に結がえしをしましたが、それ以外にも屋根ふき(カヤやワラで屋根をふくこと)や^{そつしき}葬式なども、結によってお互いが助け合って行っていました。

結には、大変なときや困ったときに近所や地域の人どうしが助け合う、思いやりの気持ちがもとにあります。こうした結の心は、時代が代わっても失いたくないものです。

こま
困ったときには、助け合うことが大切まる。助けてもらったら、お返しすることも大切まる。



1 のこしていききたいつたえていききたいことば

あつたらもん

〈意味〉

もったいない
大事な物

～とちぎ^{じん}人の想い～

おばあちゃんがよく言ってくれたことば
です。今の時代、そして、これからの時代
にこそ、大事にしていきたいです。

〈こんなときに使います〉

- まだ使えるのに捨ててしまったとき
「あつたらもんだ!」
と、注意されました。
- まだ使えるから捨てずに取っておく
とき
「あつたらもんだから、それはとって
おけ。」
と、言われました。
- 大切にしていた物をなくしたとき
「あつたらもんだったなあ。」
と、残念そうに言いました。

2 のこしていききたいつたえていききたいことば

いかんべ、えかんべ、
よかんべ

〈意味〉

よいでしょう

とちぎ^{べん}
「栃木弁」には、
ほかに、どんな
とくちよう
「特徴」があるまる?



〈こんなときに使います〉

- 何か作業をしていて・・・
「こんなもんで、いかっぺか?」
「いかんべ。」

〈プラス1情報〉

- 「いかんべ」は、他にも「いがっぺ」、「えかんべ」、「よかんべ」など類義語がたくさんあります。
- 類義語も含め、県内で広く用いられている表現です。
- 地区によっては、^{あいたがら}間柄などによって語尾が変化することもあります。
「ええかんべ」、「ええかんびゃ」、「ええかっぺ」など
- 「～べ」、「～だんべ」、「～っぺ」という語尾は、栃木弁の特徴の一つです。

3 のこしていききたいつたえていききたいことば

いしけ(え)

〈意味〉

見た目が悪い、
粗末^{そまつ}な、出来が悪い

〜とちぎ^{じん}人の想い〜

いろいろな場面で、都合よく便利^{べんり}に使って
いました。このことばを聞くと、ふるさ
とをなつかしく思い出します。

〈こんなときに使います〉

- 友達の手持っているいくつかある消しゴ
ムから1つ借りるとき
「いしけえほうでいいから貸して。」
- のりを使っていて
「このり、いしけえなあ。ちっとも
くっつかない。」

いろいろな使い方が
できるけれど、
使い方には注意まる〜!



4 のこしていききたいつたえていききたいことば

えんがみた

〈意味〉

大変だった
ひどい目に遭った

〜とちぎ^{じん}人の想い〜

もし、身近な人にこのことばを言われた
ら、そのまま放っておけない、思わず優し
いことばをかけたくなる、そんな気持ちを
起こさせてくれることばです。

〈こんなときに使います〉

- 予想もせず大変な目(ひどい目)に遭っ
てしまったときに
「今朝、畑に草とりに行ったら、帰
りに大雨にあってえんがみたよ。」
- 「昨年、車で紅葉^{じゅうたい}を見にいいたら渋滞
にはまってえんがみたから、今年は
電車で行くことにしよう。」



5 のこしていききたいつたえていききたいことば

お晩方（ばんがた）です

〈意味〉

（夕方に）

こんばんは

〜とちぎ^{じん}人の想い〜

現在の「こんばんは」「ごめんください」とニュアンスが異なり、心の中でお互い^{こと}を思いやり、ことば^{たが}を掛け合うすてきな挨拶^{あいさつ}。親戚^{しんせき}の家を訪ねるときには、親から『お晩方です』と言いなさい。』と言われたものです。

〈こんなときに使います〉

○夕方^{かいらんぼん}、回覧板^{かいらんばん}を回すために、となりの家に訪問するとき、相手方^{ばんかん}の玄関先で「お晩方でーす。」



〈プラス1情報〉

○「お晩方です」には「今日も1日お疲れ様」という相手に対する思いやりの気持ちも込められています。温かみや親しみ、なつかしさを感ずることのできることばです。

○同様に、夜には「お晩です」も使われます。

6 のこしていききたいつたえていききたいことば

ごじゃっぺ

〈意味〉

うそ、でたらめ

〜とちぎ^{じん}人の想い〜

うそのことを指すけれど、相手を責めるのではなく、思わず、ほほ笑んでしまうような、軽い感じがありました。親しい人の間で、親しみを込めて使っていたと思います。



〈こんなときに使います〉

○うそやいい加減^{してき}さを指摘するとき（相手に向かって）

「ごじゃっぺばかり言って。」

→うそばかり言って。

「それ、ごじゃっぺだっぺ。」

→それは、うそでしょう。

「ごじゃっぺしてねえで、しっかりやれ。」

→いい加減なことをしていないで、しっかりやりなさい。

（自分の行動について）

「ごじゃっぺ言っちゃった。」

→いい加減なことを言ってしまった。

〈プラス1情報〉

○「うそ」についての表現は、ほかにも「チク」などがあります。

7 のこしていききたい つたえていききたいことば

こでらんない

〈意味〉

たまらない、すばらしい
た
堪えられないほどよい

こでらんないまる〜!



〈こんなときに使います〉

- 温泉に入って一言
「ああ、こでらんねえ。」
- おいしそうな料理を一口
「このお肉、こでらんない!」
- 明日から夏休み、
「大好きな本がたくさん読める!
こでらんねえ。」

感激したときに使われる言葉で、いろいろな場面で用いられます。

8 のこしていききたい つたえていききたいことば

そばえる

〈意味〉

あま
甘える、甘ったれる

〜とちぎ^{じん}人の想い〜

末っ子の私は、子どものころいつも母親のそばにいて甘えている、かなりの「そべっ子」でした。なつかしいことです。

〈こんなときに使います〉

- 甘えている様子を表す
・子どもが、母親の膝の上でそばえて
いる。
- ・久しぶりにあったおじいちゃんに、
そばえる。

〈プラス1情報〉

- そばーいる、そばいる、そべーる、そべるなどとも言います。
- 甘えん坊のことを「そべっ子」と言うこともありました。

9 のこしていききたいつたえていききたいことば

だいじ

〈意味〉

だいじょうぶ



「だいじ」と短
いことばを掛^か
け合うことで、や
さしさや思いや
りを伝え合っ
てきたまるね。

〈こんなときに使います〉

○ころんだとき

「だいじけ?」「だいじ、だいじ!」

※相手に心配をかけないように、本当
はだいじょうぶではないのに言って
しまうこともあります。また、「だい
じ」を2回繰り返して強調すること
もあります。

○相手^{はげ}を励ますとき

「そなん、だいじだから、気にすんな。」

〈プラス1情報〉

○「だいじ」と同じ意味で、「くらねー」「く
らーね」と言うこともあります。

10 のこしていききたいつたえていききたいことば

~なんしょ

〈意味〉

~してください

相手のことを
大事に言うときの
言い方にも方言が
あるまるね。



〈こんなときに使います〉

○相手^{ごひ}を思って、語尾に付ける

「おがせぎなんしょ。」

→仕事にお励^{はげ}みください。

「おあがんなんしょ。」

→召^めし上がってください。

「おはいなんしょ。」

→お入りください。

「およしなんしょ。」

→お止^やめください。

〈プラス1情報〉

○「~っせ」も「~してください」を意
味しますが、「なんしょ」の方が、よ
り相手を敬う気持ちが強いときに使う
ようです。

11 のこしていききたいつたえていききたいことば

はしっこい

〈意味〉

①すばやい ②賢い

～とちぎ^{しん}人の想い～

「あの子は、はしっこい。」とだけ言われると「動きがすばやい」のか「賢い」のか、判断に迷うことがあります。もっとも、賢さは知恵の回りの速さにつながるのかもしれないなど思いました。



〈こんなときに使います〉

○動きがすばやい様子を表すとき

「〇〇さんちの□□ちゃんは、はしっこいから、運動会ではいつも一等なんだって。」

「私の弟は、はしっこくて鬼ごっこをやる時も最後までつかまらない。」

○賢いこと、よくできることを表現するとき

「◇◇ちゃんは、百人一首をぜんぶ覚えてるんだって、はしっこいなあ。」

「料理や家の手伝いをいつもやって、挨拶もよくできる。☆☆ちゃんは、はしっこいなあ。」

12 のこしていききたいつたえていききたいことば

ぶんぬき

〈意味〉

(型を抜いたように)
そっくりな様子

顔がそっくりな親子



〈こんなときに使います〉

○見た目そっくりな親子を見かけて

「あの親子、ぶんぬきだな～。」

〈プラス1情報〉

○「ぶんぬき」は、主に人物（特に親子）に対して用いられます。

○「似ている」という程度ではなく、「そっくり」という様子を指すことが多いようです。

13 のこしていきたい つたえていきたいことば

まさか、まさか

〈意味〉

さすが、はなはだ
思った以上に

とちぎ人^{じん}の人柄^{ひとがら}がよく
表れたことばまるね～！
温かさが伝わって、
これからも伝えていきたい
ことばまるね～！



〈こんなときに使います〉

「とちまるくん、まさかかわいい！」

〈プラス1情報〉

- 標準語では、打ち消しなどの表現といっしょに、「信じられないこと、あり得ないこと」を表現する言葉ですが、栃木県では、尊敬の気持ちなどを込めて「さすが」、「はなはだ」、「すごい」の意味で使われることがあります。
- 「まさか」よりも「まさか」のほうが、よりはなはだしい意に使われます。

14 のこしていきたい つたえていきたいことば

まぜる

〈意味〉

仲間に入れること

～とちぎ人^{じん}の想い～

遊びの輪に「入れて」と言うよりも、「まぜて」と言う方が、より積極的にみんなと親しく関わって遊ぶような意味で使いました。子どものころは、近所の公園に行って、「まぜて」と言えばいろいろな年代の子ども^{かんきょう}と遊べる環境があったものでした。



〈こんなときに使います〉

○遊びの場面で・・・

「(かくれんぼなどに) まぜーて。」

○約束して集まったわけではなく、先に公園で遊んでいる友だちの輪に入りたときに、声を張り上げて「まぜーて。」と言うと、みんなが声をそろえて「いーいーよ。」と返してくれました。

○「まぜーて」と伸ばして言うことがポイントです。

15 のこしていきたい つたえていきたいことば

みしみて

〈意味〉

しん けん

真剣に、まじめに、
しっかりと

～とちぎ^{じん}人の想い～

テレビ番組を見ながら宿題をしていると、「みしみてやりなさい!」と母に言われ、テレビを消して勉強をしました。

勉強や仕事をしっかりとやらなければならないときに使っていました。



〈こんなときに使います〉

○まじめに集中して取り組んだとき

「みしみてやったから、仕事がか
どった。」

→真剣にやったから、仕事がか
どった。

「みしみて勉強したので、テストの
点数がアップした。」

→しっかりと勉強したので、テストの
点数がアップした。

○話^{むちゅう}に夢中になってやるべきことの取
組がおろそかになっている相手^{さと}を諭
すとき

「しゃべってばかりいないで、み
しみてやりな。」

→話してばかりいないで、しっかり
と集中してやりなさい。

16 のこしていきたい つたえていきたいことば

めめくる

〈意味〉

芽が出る



〈こんなときに使います〉

○種をまいたあとに

「畑に種をまいてしばらくたったか
ら、めめくったかどうか見てきた。」

「種まいたのに、なかなかめめくん
ねえなあ。」

「ソバは、種がめめくればあつとい
う間に成長するよ。」

17 のこしていきたい つたえていきたいことば

もそい

〈意味〉

長持ちする、減らない
長続きする

物を大事に使って、長持ち
させることも大切まるね。



〈こんなときに使います〉

- 長持ちするあめ玉のことを表現するとき
「この飴あめは、もそいから、なめてみ
らっせ。」
- 火がなかなか消えないろうそくのことを
表現するとき
「このろうそくは、えらいもそいか
ら、万が一の時にも役立つよ。」

〈プラス1情報〉

- 物がなくなるまでの時間が思いのほか
長くて、価値があるときに使います。
- 「むそい」、「むそえ」、「むせー」など
とも言います。

18 のこしていきたい つたえていきたいことば

寄ってがっせ

〈意味〉

ぜひ寄って（来て）
ください

相手にいやな気持ちを感じさせ
ずに、気軽なことばとして使わ
れるまる。



〈こんなときに使います〉

- 来客びんかんがあったとき玄関先で・・・
「立ち話もなんだから、寄ってがっせ。」
- 電話の相手に・・・
「こんどこっちさ来たら、うちに寄って
がっせ。」
- 他にも似た表現で、次のようなものが
あります。
「おらげ さぐぐ 寄っとごれ。」
→私の家に 気軽にお立ち寄りください

〈プラス1情報〉

- 語尾ごひに「～っせ」という表現は、目上
の人に使うとされていることが多いた
め、相手を敬う気持ちが込められてい
る表現です。
ご覧ください→「みらっせ」
お出でください→「来らっせ」など

19 のこしていききたい つたえていききたいことば

よばれる



〈意味〉

ごちそうになる

〜とちぎ^{しん}人の想い〜

近所^{ようたし}に用達^{しん}に行ったはずの祖父が、
帰りが遅くなった理由として、
「〇〇ちゃんちで、お茶、よばれた。」
とっていました。ごちそうになって
ただけではなく、楽しく話をして和
やかな時間を過ごしてきたことも、伝
わってくる一言^{ひとこと}でした。

〈こんなときに使います〉

- 他人から食べ物^とをもらったとき
「隣の家^{とも}から桃^{もも}をもらったから、よばれよう。」
「このあいだ、〇〇さんちでおいしいいち
ごをおよばれたのよ。」

〈プラス1情報〉

- 「よばれる」は、招かれる、招待^{しょうたい}される意味
にも使います。「ごちそうになる」という意
味と、場面に^{あつこん}に応じて使い分けてきました。
「〇〇さんの結婚^{けっこん}式^{しき}によばれていって、お
なかいっぱいよばれてきたよ。」
この話の、はじめと、あとの「よばれて」
の意味は違います。
→〇〇さんの結婚^{けっこん}式^{しき}に招待^{しょうたい}されていって、
おなかいっぱいごちそう^{ごちそう}になってきたよ。

20 のこしていききたい つたえていききたいことば

雷様 (らいさま)

〈意味〉

雷 (かみなり)

雷様^{らいさま}が来た^{かく}たら、
おへそを隠^{かく}すまる。



〈こんなときに使います〉

- 雲行きを見て・・・
「こらあ、夕方は、雷様^{らいさま}だなー。」
「もうすぐ雷様^{らいさま}来^くそうですね。」

〈プラス1情報〉

- 栃木県は夏に雷が多いとされています。
- 水田に水が必要^{あそ}なときに恵^{あそ}みの雨^{あそ}をもたらすことか
ら、自然現象^{しぜんげんじょう}への畏^{おそ}れや敬^{ひく}意^いを含む、親^{おや}しみを込^こめた
ことばでもあります。
- 言い伝えとして、大きな雷が近^{ちか}付^ついてきたら線香^{せんこう}を立
てて「くわばらくわばら」と^{くわ}繰り返^{くわ}し唱^なえるといっ
ものがあります。葉^{くわ}の葉^{くわ}が雷^{くわ}よけの葉^{くわ}といわれている
ことに由来^{ゆらい}しています。
- 雷^{かみなり}が鳴^なったらおへそを隠^{かく}すといわれますが、おへそを
隠^{かく}す姿^{すがた}勢^{せい}が、頭^{あたま}を低^ひくし、雷^{かみなり}から身^みを守る姿^{すがた}
勢^{せい}になるからだともいわれています。



県民の歌

「子どものころから歌い、親しみがある。」
 「なつかしい気持ちになる。」「ふるさとへの
 想いを呼び起こす。」と応募がありました。

県民の郷土愛を高め、明るく豊かな住みよい郷土をつくるため、県内在住者及び県出身者から公募、選定し、昭和37年に県民の歌がつけられました。歌詞には、栃木県への愛や親しみを感じられ、県民の心が一つになる歌です。

【プロスポーツの応援のときにも歌われています】



栃木 SC ©TOCHIGI SC



リンク栃木ブレックス ©TOCHIGI BREX

～とちぎ人の想い～

小学校のときに、授業で習いました。大人になってみんなで歌うと、栃木県に生まれて良かったなあと思い、感動する瞬間があります。

〈県民の歌〉

作詞 岡きよし 作曲 川島博

1 番

とちの葉の 風さわやかに
 晴れわたる 町よいらかよ
 男体は 希望に明けて
 日の光 よもにみなぎる
 栃木県 われらの われらのふるさと

2 番

鬼怒川の 水きよらかに
 尽くるなき さちよ恵みよ
 生産は 日ごとに伸びて
 躍進の いぶきたくまし
 栃木県 われらの われらのふるさと

3 番

人の和の 夢おおらかに
 盛りあがる 自治よ自由よ
 けんらんの 文化にはえて
 とこしえに 若さあふるる
 栃木県 われらの われらのふるさと

ダ・カーポの歌声でおなじみです。なお、県民の歌は、平成26年3月4日に通信カラオケで全国配信が開始されました。

ご協力いただいた方々

〈順不同 敬称略〉

- 大田原市佐久山地区公民館
- 大山 栄 氏 (益子町)
- 小山市立博物館
- 鹿沼市自然体験交流センター
- 勝願寺 (鹿沼市)
- 栃木県文化協会
- 栃木県立博物館
- 栃木サッカークラブ
- 那須塩原市那須野が原博物館
- 日光市
- 「八月の会」(真岡市)
- 在宅介護支援施設ひだまり (日光市)
- ほたるの里 梵天の湯 (宇都宮市)
- 実生 (宇都宮市)
- 村松山虚空蔵堂 (茨城県)
- 株式会社 湯西川水の郷
- リンク栃木プレックス

参考文献 等

- 「栃木県民俗事典」下野民俗研究会編 平成 2 年 下野新聞社
- 「栃木民俗探訪」とちぎの小さな文化シリーズ企画編集会議編 平成 15 年 下野新聞社
- 「小山市立博物館第 71 回企画展図録 糸と布をめぐる手しごとの旅」
平成 30 年 小山市立博物館
- 「小山市史」小山市史編さん委員会 昭和 53 年
- 「真岡市史」真岡市史編さん委員会 昭和 61 年
- 「栗山村誌」栗山村誌編さん委員会 平成 10 年
- 「鹿沼市史」鹿沼市史編さん委員会 平成 11 年
- 「芳賀町史」芳賀町史編さん委員会 平成 14 年
- 「栃木県の年中行事」尾島利雄 共著 昭和 54 年 第一法規出版
- 「栃木の祭り」柏村祐司 平成 24 年 随想舎
- 「昭和はじめのこどもの四季 栃木県茂木町地方における 遊びと民俗」藤間恭助 平成 4 年
- 「ふるさと読本栃木」栃木県連合教育会「ふるさと読本栃木」編集委員会
昭和 57 年 第一法規出版
- 「栃木の方言をたずねて」森下喜一 平成 11 年 白帝社
- 「栃木県方言辞典」森下喜一 平成 22 年 随想舎
- 「栃木方言の源 (ルーツ) を求めて」森下喜一 平成 18 年 随想舎
- 「下野の故事ことわざ事典」栃木県教育研究所 昭和 57 年 三弥井書店
- 「村松山虚空蔵堂の十三詣り」村松山虚空蔵堂リーフレット

こちらも
みてみよう!

ひやくさま とちぎの百様

栃木県では、県民の郷土愛の醸成と栃木県のブランド力の向上を図るため、後世に残したい、大切にしたい、自慢できる栃木県の 100 の地域資源を「とちぎの百様」として選定しています。

<http://www.100sama.tochigi.jp>



あとがき

資料集を作成するに当たり、皆様から広く事例を募集しました。応募された方の中には、事務局へ足を運んでお話をしてくださる方、これまで書き留めていたものを役立ててほしいと手紙を送ってくださった方、また、お亡くなりになったご主人が残されたノートを送ってくださった方、現在は栃木を離れてしまったけれど当時に思い出してみたと県外から応募してくださった方など、様々な方がいらっしゃいました。この資料集を通して、そのような温かく懐かしい「とちぎ人の想い」を多くの方にお届けできたら幸いです。

ご応募いただいた皆様、そして、取材の協力や写真の提供等お力添えをくださいました皆様に、あらためて感謝いたします。

とちぎの活動様式伝承に関する資料作成委員会 〈順不同 敬称略〉

◎委員長、※ワーキンググループメンバー

〈委員〉

早川 愛子 (早川礼法きもの学院 代表)

宇賀神いづみ (株式会社下野新聞社 暮らし文化部長)

堀川 祐司 (株式会社とちぎテレビサービス 代表取締役社長)

◎篠崎 茂雄 (栃木県立博物館 学芸部長補佐兼人文課長)

高橋 健司 (栃木県県民生活部県民文化課 主任)

新井 義之 (佐野市立犬伏小学校 教頭 前安足教育事務所 副主幹兼ふれあい学習課長)

青木 孝浩 (栃木県教育委員会事務局学校教育課 副主幹)※

高田 玄 (河内教育事務所ふれあい学習課 副主幹兼ふれあい学習課長)※

神山 幸江 (上都賀教育事務所ふれあい学習課 社会教育主事)※

添谷 元良 (芳賀教育事務所ふれあい学習課 副主幹)※

高山 康代 (下都賀教育事務所ふれあい学習課 副主幹)※

加々美仁実 (塩谷南那須教育事務所ふれあい学習課 社会教育主事)※

横田 洋勝 (那須教育事務所ふれあい学習課 副主幹)※

近藤 正和 (安足教育事務所ふれあい学習課 副主幹)※

小柳 真一 (栃木県総合教育センター生涯学習部 社会教育主事)※

〈事務局〉

野原 正祥 (栃木県教育委員会事務局生涯学習課長)

平野 紀子 (栃木県教育委員会事務局生涯学習課 主幹)

竹澤 智明 (栃木県教育委員会事務局生涯学習課 課長補佐)

吉田 正道 (栃木県教育委員会事務局生涯学習課 副主幹)※

長島麻里子 (栃木県教育委員会事務局生涯学習課 社会教育主事)※

茂木 幹雄 (栃木県教育委員会事務局生涯学習課 社会教育主事)※

大山 健男 (栃木県教育委員会事務局生涯学習課 社会教育主事)※

(所属、役職は、2019年3月末現在)

とちぎの慣習・ことば集

～のこしていきたい つたえていきたい とちぎ人の想い～

平成31(2019)年3月

編集・発行 栃木県教育委員会事務局生涯学習課

<http://www.pref.tochigi.lg.jp/m06/kansyuukotoba.html>

VERY 
GOOD
LOCAL

とちぎ